

非常時下の兒童教育

學藝部長 小笠原秀實

非常時下の兒童教育を何うしたらいいか云ふ問題ですが、かうした實踐の問題が、原則的に一箇條できまるものではなく、何かいろいろ考へ合せねばならぬこゝに存じます。こゝに申上げたいと思ひますのは、さうしたこゝのほんの一つに過ぎません。

治に居て亂を忘れるな云ふ教訓は、大變結構で意味の深いものでありますが、それが大切であると同様に、亂に居て治を忘れてはならぬこゝも重要なやうに思はれます。人間の歴史は、將來も、幸か不幸か、尙幾度も治亂の終りを通じて進むこゝでせう。その都度治に居ては亂を忘れず、亂に居ては治を忘れない覺悟が必要に存ぜられます。

非常時とは、文字の示す如く常時ではありません。これは永久常住の姿か、又或時期の間堪え忍ばねばならぬ非常の姿かを申します。文字の示す如く非常の姿を考へて差支ないに存じます。

そこで非常時には、老幼男女を問はず、誰も非常な熱情を以つて、時勢を解決するに努力しなければならぬのは、もよより當然であり、この爲にはいろいろの施設、いろいろの激勵が與へられねばなりません。實際に於ても、このこゝが様々努力の中心になつてゐるこゝは感激の外ないのであります。然しこの望ましいこゝが、時場合一度を失するに、本來の望ましさを弱める場合が無いとは申されません。

かうした抽象的なこゝを申上げて、結局之れは何のこゝか解らぬこゝになりますので、こゝに私の少年時代の非常時を回顧して、心附いてゐる一つのお話を申上げたいに存じます。

今から四十年も前になりました。私が四年の尋常小學校を終つて、高等一年になつた頃だと思ひます。云はゞ十二歳ばかりの少年の時、我が國は、まことに國の運命を賭して思はせるやうな戦争を致しました。敵は大國であり、我々少年は日本の小さいこゝを教へられて居りましたから、負けねばいゝが云ふ恐れを懷く共に、言葉にも盡せない愛國の至誠に燃え上つたのであります。

丁度之れは暑い夏の休暇で、學校は休みになつて居りました。私の村―今は町になつて居りますが―三百戸ばかりの、云はゞ大村の方でした。私はこの村の村長のお孫さん同窓でありましたが、多分村長さんからの意見であつたのでせう、この際高等小學校の生徒も、有志者で、軍用献金の寄附を集めたらどうか云ふことを、そのお友達から持ち込まれました。私は無論喜んで之れに加はり、同志四人であつたと思ひますが、大體お願ひに上つていゝ家を聞かせてもらつて、炎天下に、あちこち歩きまはりました。心よく願ひを聞いて下さる家もありましたが、もう一つはつきりしなかつたお宅もあつたやうです。何故我々の誠心を通じないのかさへ思はれたこゝもありました。然し之れらは何れも日常の行掛りのやうでもあり、今これにて印象に残つて居るこゝはありません。

こゝろが一つ是非申上げねばならぬこゝが、ある日の終末に起つて參りました。

前申したやうに、私たち四人は尋常を卒業して高等の生徒です。こゝろが尋常の校長さん云ふのは、昔千石取の家老の次男で、漢學が達者でありましたから、我々四人の者は、學校の餘暇に漢籍の素讀をしてもらひに行つてゐたのです。大學から始めて四書全部が済む五經の素讀です。之れが済む國史略とか十八史略とかを讀んでもらふのですが、たゞの素讀で一向何のこゝか解りませんでした。今の漢學教程から行けば、誠に逆倒的でした。讀んでもらふ方も何のこゝか解りませんでした。讀んで下さる方でも、さばはつきりした認識はなかつたのでせう。書經なき云ふ書物は、何時誰に解るか解らない云ふ點も相當ありませうから、尙この書の研究が澤山の論文を作らせるこ

でせう。かうしたことが、云はゞ子供ながら村夫子の概念を構成してゐたのでせう。この先生を畏れましたが、さほゞ敬愛はしてゐませんでした。時には戯談もされるので、からかつて見るに云ふことも、人に依つてはあつたでせう。思想としては排佛毀釋當時の儒者ですから、佛教や佛徒を兎角嘲笑され勝ちでした。然し國家的信念は大へん堅い先生で、毎日、東天を仰いて敬禮されてゐるのを見ては感佩したものであります。

私達四人は、この校長さんの玄關に立ちました。玄關に云つても疊一帖ほゞの切庭で、家も小間が三間四間に云つた質素に云はうより貧弱な感じでした。之れが村はづれの塵つぽい街道に面してゐるのです。今から考へて見るに先生はかなり困つてゐられた生活條件だつたに推定されるのです。然し少年の私共に校長先生のポケットなごを忖度し得る能力のあらう筈はありません。先生はこの美事善行に感激して、我々を驚かすばかり澤山投げ出されるのだと思つて居りました。

玄關の土間に立つて來意を告げるに、先生は承知されました。然し云ひ出される額は、又我々を驚かすほゞ少ないものでありました。するに村長のお孫さんは、私なごよりは、馴染んで居られるので、「先生！もつと出して下さい」に云ふことをせがんだのです。先生は「こんな狭い處に居るのだから、お前達の家のやうには行かん」に斷られました。するに村長のお孫さんは「何が狭いです」に云つて、すぐに聲を張り上げて「やあ！金作り、金作り金作り」ミ手をたゝいてわめき立てました。私は何だか解らぬが威勢のいゝ面白いことだと思ひました。するに先生は、つむじを曲けて「さう云ふ無禮な奴には一錢もやらぬ、出直ほして來い」に激怒されました。「さて、えらいことになつた、こんなことが家へ知れたら叱られるのではないか」に私は心配しました。

翌日、村長のお孫さんに會ひましたら「昨日は金作りに云つたのではない、木で造つてあるから木造り、木造りに云つただけですよ」に云ふことで子供の笑で終つて了ひました。

こゝで私の申したいのは美事善行であればあるほど、美事善行を傷けないやうに、愛と謙譲とに満ちてやつて行かねばならぬと云ふことです。愛と謙譲とは、亂世の徳であること云ふよりも、治世、和平時の徳でせう。非常時に望ましいこと云ふよりも、常時に望ましい徳でせう。之れにも拘はらず、非常時が美事善行を要求すればするほど、平常時の徳を忘れてはならぬやうに存じます。

宗教、就中佛教の教養は、治亂に一貫する常住心の實現であり、常時非常時に遍通する不動不壞の金剛心を確立するこゝにあると存ぜられます。この點に於て、非常時下に於ては、特に常住心、不動心を養成し、表面的な、そして又一時的な焦燥心を純化すべきであること考へたいのであります。

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。